



Title	イギリス帝国史再考
Author(s)	宮崎, 章
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2001, 35, p. 51-76
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48090
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イギリス帝国史再考

宮 崎 章

一 はじめに

イギリス帝国史研究史において、ロナルド・ロビンソンとジョン・ギャラハラの『アフリカとヴィクトリア時代の人々』⁽¹⁾(一九六一年)は、一つの転換点とみなされている。帝国主義のダイナミックスをヨーロッパではなく、非ヨーロッパ世界、いわゆる「周辺」にもとめた同書は、折からのアフリカ諸国の独立ともあいまって、一九六〇、七〇年代における地域史研究の隆盛のきっかけになったといわれる。⁽²⁾すでに、その一年前に、J・S・ガルブレイスが、イギリスの海外膨張の要因として「荒れるフロンティア」をあげて、アジア、アフリカのヨーロッパ人による「サブ・インペリアリズム」の重要性を指摘しているが、⁽³⁾ロビンソンとギャラハラによるエジプトやトランスヴァールの「プロト・ナシヨナリズム」の発見が、アフリカ史研究者にインスピレーションを与えたのは想像に難くない。

しかし、一九八〇年代にはいると、イギリスの研究者の間から、帝国史研究の現状を憂う声が聞こえるようになって

る。一九八二年に、ケンブリッジ大学ジーザス・カレッジ・フェロー就任講義において、デイヴィッド・フィールドハウスは——彼自らも、一九七〇年代に「周辺」理論を唱えていたが——当時の帝国史を「ハンプティ・ダンプティ」にたとえて、地域史研究の隆盛が歴史の断片化をもたらしたことを指摘している。⁽⁴⁾ また、二年後には、ケンブリッジ大学スマッツ・コモンウェルス史教授就任講義において、D・A・ロウが、ジョン・シーリーの『イングリランドの膨張』をもじって、旧植民地諸国の歴史における「イングリランドの収縮」に言及して、「周辺」理論が、「現地の危機」に巻き込まれた「不本意な帝国（主義者）」を描くことで、アジア、アフリカから本国イギリスに「帝国のファクター」を取り除いてしまったことを示唆している。⁽⁵⁾

このようなハンプティ・ダンプティ的な帝国史を再び統合し、イングリランドを再度膨張させて帝国の巻き返しをはかったのが、ピーター・ケインとアンソニー・ホプキンスの『イギリス帝国主義』⁽⁶⁾（一九九三年）であるというのが、今では通説になっている。「中心」と「周辺」のみならず、一八、一九、二〇世紀を有機的に結合し、帝国の心臓部としてのイギリスを再確立した同書は、デイヴィッド・キャナダインが述べたように、まさに「帝国の逆襲」といわれている（ちなみに、ジェントルマン資本主義論のロンドン中心的な解釈は、一九九〇年代のEU統合とスコットランドやウェールズの地域主義を背景とした「イギリスの逆襲」といえるだろう⁽⁷⁾）。最近の論文の冒頭で、帝国主義を「ある国・地域を、別の国家の政治・経済・文化システムに同化させようとする持続的な力」と定義したジョン・ダーウィンも、同書を「帝国衰退というおおげさな風説に対する歓迎すべき修正」と評している。⁽⁸⁾

そして、以上のような帝国史研究史、および再構築された帝国史は、今日、多くの研究者に受け入れられているように思われる。

二 帝国史の再構築

なぜ、イギリス帝国史の再構築が必要なのだろうか。まずは、その主唱者ともいえるアンソニー・ホプキンスの言説をみていく。

一九九七年のケンブリッジ大学スマッツ・コモンウェルス史教授就任講義をもとにして書かれた論文「バック・トゥー・ザ・フューチャー——ナショナル・ヒストリーから帝国史へ——」（一九九九年）のなかで、ホプキンスは、ポスト帝国の世紀末に危惧の念を抱いている。今日、研究者の目は、帝国の後を継いだ国家の歴史に向けられている。かつての中心イギリスから世界を眺めることは、時代錯誤であるのみならず、ポストコロニアル研究全盛の時代には受け入れられないヨーロッパ中心主義と人種差別を助長するとみなされる。歴史学のなかで、帝国史研究者は、かつての地位を失っている。一方、地域史研究者は、強大な知の砦を築きあげ、より広い統一体に組み込まれるのを拒んでいる。彼らは、ナショナル・ヒストリーを書くことに専念し、その結果、周辺は、中心から分離するのみならず、互いに没交渉になっている。⁽⁹⁾

このような時代にあつて、帝国史研究者は、自らの存在意義をみいだすことができるのか。ホプキンスは、過去（Ⅱ帝国）と現在（Ⅲ国民国家の危機、およびグローバリズム）との関連性を指摘する。巨大な多人種・多民族集合体である帝国は、現在国民国家が直面している諸問題を克服する糸口になりうる。また、他の帝国以上に世界に浸透し、世界を統合したイギリス帝国は、今日のグローバリズムのさきがけであり、そのメカニズムの解明に役立つ事例を提供しうる。このように、今日的意義を獲得することで帝国史が再活性化されるためには、グローバルで

マルチ・エスニックな強大な帝国が築かれなければならないのである。⁽¹⁰⁾

最近刊行された『オックスフォード・イギリス帝国史』シリーズ（一九八八―一九九九年）も、こうした動きを反映している。『イギリス帝国主義』よりもさらに時代を遡って一七世紀も包括し、中心と周辺を有機的に結合するだけでなく、社会・文化という範疇のもと、さまざまな領域を研究テーマとして取り入れた同シリーズからは、ポスト帝国の時代を生き抜こうとする帝国史研究者の意気込みが感じられる。興味深いのは、編集主幹が、テキサス大学のウィリアム・ロジャー・ルイスで、スポンサーとして、ローズ・トラストとともに、ワシントンの国立人文科学財団が名を連ねていることである。一見すれば、ほぼ一世紀前のアングロ・アメリカニズムの再来とも考えられるが、あきらかに力関係は逆転している。合衆国のアカデミック帝国主義に敏感なイギリスの研究者がいなければ、⁽¹¹⁾ではないが、ルイスが、第二次世界大戦後のイギリス帝国はアメリカの力に支えられていたと論じているように、今日の多くのイギリス帝国史研究者が、アメリカの力を借りてでも、帝国史研究を存続させていこうと考えているのは間違いないだろう。

イギリス帝国の再構築は、同時に、国民国家批判を意味する。ホプキンスによれば、かつて帝国の正当な後継者と考えられた国民国家は、現在、政治的安定や経済的發展をもたらすことができずにいる。崩壊の危機にあるユーゴスラヴィアやルワンダはもとより、イギリスや合衆国のような国さえも、地域主義や多文化社会の問題に直面している。また、国民国家は、経済のグローバル化や世界規模の環境問題に対してほとんど無力である。このような国民国家が生み出すナショナル・ヒストリー（一國史）が、「知の砦」というメタファーが示すように、排外的、狭量的な歴史ととらえられているのは先述のとおりである。一方で、ホプキンス自らが、ロンドン中心的な、スコ

ットランドやウェールズがみえないイギリス史を提示しているのはなんとも皮肉である。

ナショナル・ヒストリーの負のイメージは、一九六〇～七〇年代の帝国史研究の負のイメージにつながる。その一例が、「周辺」という言葉である。もちろん、ロビンソンとギャラハ―は、そのような言葉を用いておらず、ただ「現地の危機」に言及しているだけである。彼らの説明を「アフリカ中心的」解釈と呼ぶ研究者もいたが、「周辺」は、おそらく、経済史研究者が、経済的要因およびヨーロッパ「中心」の重要性を示すために従属理論から借りてきた用語だと思われる。⁽¹³⁾これに対して、ロビンソンは、一九七〇年代の初めから「偏心」という言葉を用いていたが、⁽¹⁴⁾その後の世界システム論の流行もあってか、今では、「周辺」が、研究者の間で定着しており、ケインとホプキンスも、ロビンソン、ギャラハ―批判においてそれを用いている。しかし、「周辺」は、マジナルという意味を含むとともに、帝国主義の非経済的要因を重視する『アフリカとヴィクトリア時代の人々』を経済史Ⅱ従属理論の文脈におくことで、ロビンソンとギャラハ―の説明を曲解しているといえよう。対照的に、彼らの自由貿易帝国主義が生み出した「非公式帝国」は、ヨーロッパ中心的概念ゆえに、つまり強大な帝国ゆえに広く受け入れられているように思われる。

もう一つの例は、フィールドハウスの「ハンプティ・ダンプティ」である。これは、今では、イギリス帝国史研究史の常套語として、多くの研究者によって引用されている。そこには、ナショナルリズムが帝国のみならず帝国史も破壊したことが、暗に示されているといえる。一方、ロウの「イングラントの収縮」に研究者がほとんど言及しないのは、イギリスの衰退に触れまいとしているからなのだろうか。

三 帝国史とポストコロニアル研究

一九九六年の論文「帝国史とポストコロニアル理論」のなかで、デーレン・ケネディは、イギリス帝国史研究者の保守的傾向を批判している。彼らは、シーリー以来の経験主義、実証主義の伝統をいまだに固守しつづけている。一方で、近年、さまざまな部外者が、彼らの研究領域を侵し始めている。なかでも精神的に活動しているのが、文芸批評家である。ポスト構造主義理論で武装した彼らは、今にも「帝国史研究を植民地化」しそうな勢いである。このような動きにいかに対処すべきか。ケネディは、帝国史とポストコロニアル理論との対話を提言している。⁽¹⁵⁾

たしかに、イギリス帝国史におけるポストモダン文芸批評家の活動には目をみはるものがあり、その最も顕著な例が、サバルタン・スタディーズといえる。これは、もともと、一九八二年にラナジット・グーハを中心とするイギリス、インド、オーストラリアの南アジア史研究者が始めた「下からの歴史」だったが、アントニオ・グラムシの「サバルタン」をその名に冠したことで、のちにガヤトリ・スピヴァックに「発見」され、⁽¹⁶⁾ 言語論的転回をとげて今日にいたっている。

ホプキンスは、ナショナル・ヒストリーだけでなく、ポストモダンズムも徹底的に批判している。ポストモダン研究者は、文化的なテーマに没頭して不必要に研究領域を狭めている。イメージやシンボルを考察する彼らは、事実の存在を疑い、現実の政治的・経済的な問題に取り組むことを避けている。今や、マルクスは忘れ去られ、あたかも、世界じゅうから紛争や貧困が消え去ったかのようなのである。このような研究は、ここ数十年西洋社会が比較的安定しているからこそ可能な、いわば「豊かな時代の道楽」にすぎない。さらに、研究の独創性を強調するために

用いられる難解な用語は、外部の研究者との対話を拒んでいる。

ここまで徹底的に批判されるのはなぜか。パトリック・ジョイスが指摘しているように、帝国史研究者のみならず、イギリスの多くの歴史家がポストモダンズムを等閑視しているのは、そこに、学問研究の政治学が作用しているからだと思われる。⁽¹⁷⁾ ホブキンズは、近年の博士論文のテーマが文化史に偏っていることに、ポストモダンズムの影響をみている。「帝国史研究の植民地化」というメタファーは、学問分野のナショナルリズムを如実に示している。ポストモダンズムがアメリカの学界を席卷していることも原因の一つだろう。ナショナル・ヒストリーを批判する帝国史には皮肉な状況である。

これに関連して重要なのは、ホブキンズも認識しているように、ポストコロニアル研究が、ポスト構造主義理論でもって、再構築された強大な帝国——彼のいう「全体化のプロジェクト」——を脱構築するかもしれないということである。被抑圧者の解放をめざすポストコロニアリズム/ポストモダンズムは、資本主義の自己矛盾ではなく、支配的言説が孕む矛盾——「断層」⁽¹⁸⁾、「裂け目」——をつくことで、社会主義革命ならぬ認識論的革命によるユートピアの到来を待望している。近年、イマニエル・ウォーラーSTEINが、ベーコン・ニュートン科学とは異なる「新科学」——イリア・プリゴジンの理論——を援用して、資本主義的世界経済の終焉を予測し、新たな世界システムへの移行を展望しているのは、ポストモダンズムの影響を示唆⁽¹⁹⁾して興味深い。再構築された帝国の脱構築は、イギリス帝国史研究の存在理由を脅かすものだといえる。

スピヴァックとならんで、イギリス帝国史に足を踏み入れたポストモダン文芸批評家としてあげられるのが、エドワード・サイードである。一九九三年の著書『文化と帝国主義』のなかで、サイードは、『オリエンタリズム』

(一九七八年)でおこなった議論を文化帝国主義の文脈において展開している。日常生活の隅々まで権力を浸透させるイデオロギー的手段に注目する彼は、「帝国主義のミクロ物理学」の重要な要素として、西洋人と現地人の根本的相違に基づく不変かつ絶対的な「統一言説」をあげている。⁽²⁰⁾ここに描かれているのは、全能の帝国主義、偏在する帝国主義、一枚岩的な帝国主義であるといっても過言ではない。ホプキンスが、批判しつつも、オリエンタリズムを一種の帝国主義——「全体化のプロジェクト」——とみなしているのも不思議ではない。おそらく、サイードの急進的な反帝国主義が、そのように強大な仮想敵を生み出したのだろう。

イギリス帝国史研究者のなかで反オリエンタリズム論の急先鋒となったのは、ジョン・マッケンジーである。著書『オリエンタリズム——歴史、理論、芸術——』(一九九五年)において、マッケンジーは、オリエンタリズム論の最大の難点は、その非歴史性にあると指摘している。西洋と「他者」の二項対立は、それぞれの多様性・不均一性を無視してしまうだけでない。「他者」の完全な客体化は、それから主体性を奪ってしまった、両者の相互関係が見落とされることになる。このような画一的で静態的な西洋と東洋が描かれるのは、歴史的コンテクストを考慮した分析がなされていないからである。⁽²¹⁾以上のことから、マッケンジーは、サイードの研究は、歴史家にとってほとんど価値がないと論じている。⁽²²⁾

たしかに、オリエンタリズム論の非歴史性は否定しがたい。ただ不思議なのは、同じく帝国史に足を踏み入れていたスピヴァックやホミ・バーバが、同様の批判を免れてきたことである。特にサイードがマッケンジーの批判対象となつたのはなぜか。

マッケンジーを編集主幹とする『帝国主義研究』シリーズ(一九八四年)も、イギリス帝国史の再活性化の一

環ととらえることができる。今や、帝国史は、社会・文化という範疇のもと、考えられるありとあらゆる領域を研究テーマとしつつある。帝国主義は、植民地のみならず本国の隅々まで浸透し、帝国が消滅した今日においても人間の意識をとらえて離さない。このように——歴史的コンテクストによって限定されているとはいえ、それでも、かつてよりは——強大な文化帝国主義を築きあげてきたマッケンジーが、サイドの同じような文化帝国主義に目をとめないはずがない。一方、スピヴァックやバーバは、そのような帝国主義を発する側ではなく受ける側にいるので、マッケンジーにとって関心の対象外だったのかもしれない。

しかし、もう一步議論を進めるとすれば、サイドと同じ側にいるゆえに、マッケンジーは、スピヴァックやバーバと距離をおかなければならないのではないか。彼は、『オリエンタリズム』のなかで、サイド批判のためにポストモダン文芸批評家を引用しているが、それは、自らの文化帝国主義も危うくする⁽²³⁾。したがって、彼は、すぐに反対側に移って、最後まで歴史家の立場から批判をおこなっている。

つまり、歴史家の立場に立つことで、マッケンジーは、帝国史からサイドのみならず、ポストモダン文芸批評家すべてを締めだしたといえよう。しかも、サイドだけが批判対象にあげられることで、強大な帝国主義というイメージが再確認されたともいえる。こうすれば、ポストコロニアル研究によるイギリス帝国史の脱構築はありえない。

四 帝国史の偏心

これまで論じてきたように、近年イギリスの研究者の間にみられる帝国史の再活性化の試みは、強大な帝国（主

義)を再構築しつつある。また、それと並行して、ナショナル・ヒストリー、およびそれとかかわる帝国主義論が否定的に解釈され、ポストコロニアリズムが、オリエンタリズムとほぼ同一視される状況になっている。

しかし、すべての帝国史研究者が、そのような再活性化を歓迎しているわけではないように思われる。新しい帝国史は、あきらかに帝国主義を発する側の歴史、つまり、本国および植民地のイギリス人からみた歴史といえる。そこでは、帝国主義を受ける側の歴史、植民地の非ヨーロッパ人からみた歴史は、あまり考慮されていない。後者の歴史だと、『イギリス帝国主義』も『オックスフォード・イギリス帝国史』シリーズも書くことができない。その結果、そのような歴史は、帝国史の動向からとり残されてしまっているような観がある。たしかにトータル・ヒストリーも必要だが、同時に、ナショナル・ヒストリーも発展させていくことが、イギリス帝国史研究の真の再活性化につながるのではないだろうか。

先述したように、「周辺」は、ヨーロッパ「中心」の重要性を主張する帝国史研究者がアジアやアフリカを表象した用語といえる。「周辺」理論と今日呼ばれているものを最初に唱えた研究者の一人であるロビンソンが、一九七〇年代の初めから用いていた「偏心」という言葉は、研究者に受け入れられることなくすたれてしまっている。「中心」から歴史をみる研究者にとって、「周辺」はあくまで「周辺」である。仮に今、この「偏心」という言葉を復活させて、帝国主義の重心を非ヨーロッパ世界に移してみるとどうなるだろう。

これを、帝国史を再び「ハンプティ・ダンプティ」に戻す試みということもできるが、帝国史研究の再活性化のための「バック・トゥー・ザ・フューチャー」と考えることもできる。ホブキンズも指摘しているように、最新のものが最善とはかぎらない。研究史をもう一度振り返ることで、今日の研究者にはみえにくくなっているものがみ

えてくるように思われる。また、非ヨーロッパ世界に重心を移すことで、帝国史は、オリエンタリズム論とは異なる、非ヨーロッパ人の視点に立つポストコロニアル研究と対話することが可能になる。フィリップ・ダービーは、帝国史よりもアフリカ史のほうが、ポストコロニアリズムのペースペクティヴと調和していると述べている。⁽²⁴⁾ アジア史の場合もそうであることは、サバルタン・スタディーズをみればあきらかである。アジア人やアフリカ人のエンパワーメントをめざすのならば、ホプキンスが試みている「ナショナル・ヒストリーから帝国史へ」の動きを逆転させるべきではないだろうか。

いわゆる「ウエスタン・インパクト」は、ヨーロッパ中心的帝国主義の代名詞である。この言葉からは、世界じゅうに膨張していく強大なヨーロッパの姿がイメージされる。従来、多くの研究者が、「ウエスタン・インパクト」を所与としてきたように思われる。「現地の危機」や「荒れるフロンティア」は、ヨーロッパの強い圧力が誘発したものであるから、結局は中心理論を補強しているにすぎないというエリック・ストークスの指摘が説得力をもつのは、そのためである。しかし、「ウエスタン・インパクト」は、場合によっては、ヨーロッパの力を過大評価してしまっているのではないだろうか。

タバン・レイチャウドリは、一九世紀のインドにおける外国資本の支配は——自国産業に向けられるべき資金の国外流出ともいえる規模のイギリスの投資をもつても——「飛び地」的なものにすぎなかったと論じている。⁽²⁶⁾ カルカタやボンベイを一步出ると、そこには、マーケットではなくバザールが支配する世界が広がっている。レイチャウドリの議論が、いわゆる「二元経済」モデルに依拠しているのは間違いない。同じようなアプローチは、時代は一九七〇年代とかなり下るが、タンザニアの低開発の原因を「捕捉されていない農民」にもとめるグラマン・

ハイデンの研究にもみられる。⁽²⁷⁾近年、フィールドハウスは、第三世界の植民地にとって問題なのは、資本家の搾取ではなく、資本家が十分に搾取できなかったことであると論じている。⁽²⁸⁾

たしかに、このような主張を低開発に対するヨーロッパの罪状否認、もしくは第三世界への責任転嫁と解釈することは可能である。また、二元経済論に対して、資本主義が、労働力の再生産をアジア、アフリカの現地社会に担わせるために、前資本主義的経済を部分的に存続させていると考える「接合」理論が出されているのも事実である。⁽²⁹⁾さらに、経済史におけるパーセントの数字の評価をめぐる議論は、グラスは半分入っているのか、それとも半分空なのかと同じように、決着がつくことはないだろう。⁽³⁰⁾しかし、少なくとも、「ウエスタン・インパクト」を所与とすることが妥当かどうか問われるべきであるように思われる。

本國で帝國支配を担っていたのは、主にインド省と植民地省だが、一九四七年にインド相が、「こちら側から我々ができることは、ほとんどあるいは何も無い」と総督に述べたように、⁽³¹⁾通常、實際の力とイニシアティブは、いわゆる「現場の人間」にあったといえる。ロナルド・ハイアムは、本國で決定される政策と植民地でおこなわれる統治との間にある根本的なギャップ、つまり、リベラルな社会の政治意思をリベラルでない社会において政治行為に表すことの不可能を指摘し、帝國は「領土のがらくた袋」にすぎなかったと論じている。⁽³²⁾この表現が適切かどうかはともかく、帝國には常に遠心的な力が作用していたのは間違いないだろう。

アジア、アフリカにおける帝國主義を特徴づけるのは、ヨーロッパ人の圧倒的な数的劣勢である。デー・ケネディは、第二次世界大戦前のケニアと南ローデシアの入植者社会を「白い島」にたとえている。⁽³³⁾イギリス人は、強者＝支配者であると同時に、弱者＝極小マイノリティである。白人入植者の言説からは、強さと同時に弱さ——敗

北、失敗、不安、疑念、恐怖——を讀みとることができ(34)。イギリス人がおかれていた状況を最もよく示すのは、ヒル・ステーションと呼ばれたアッサム、シムラ、オータカマンドである。毎年彼らがそこに赴くのは、酷暑のみならず下界のインド人社会から逃れるため、少数先住民を追いやり居留地に囲い込むのとは対照的である。

このような極小マイノリティによる支配が、なぜ可能だったのだろう。植民地支配は物質的な力よりもイデオロギー的な力に支えられていたと考えるサイドの「帝国主義のミクロ物理学」は、支配の不可視性をイメーシさせる。たしかに支配の不可視性は重要な点だが、それは、サイドと異なり、大多数のアジア人やアフリカ人が、ほとんどイギリス人を見ることがなく日々暮らしていたという意味においてである。白人が「遠い」存在だったから、彼らは、支配されていることを強く意識しなかつたといえる。逆にいえば、白人の存在が——直接、姿はみえなくても——身近に感じられるようになると、不満が生じ、やがて反抗に発展しかねない危険が出てくる。ここに、植民地支配のジレンマがある。ブルース・バーマンは、収奪(＝利益)と統御(＝治安)のトレードオフ的な関係を指摘している。(35) 極小マイノリティゆえに、イギリス人の第一の関心事が後者だったのは想像に難くない。こういう理由——「臆病な支配者」——から、ニール・チャールズワースは、イギリス帝国主義の罪は、搾取によるインドの貧困化ではなく、すでにある貧困を目の前にして無力だったことにあると論じている。(36) また、B・R・トムリンソンは、本国の利益と現地の治安との板ばさみになる植民地政府の視点から、インドの非植民地化の過程を考察している。第一次世界大戦時の収奪は、両者の均衡を保つために、権力の部分的委譲という代償を伴い、第二次世界大戦時の収奪は、両者の均衡を完全に崩すことで、独立付与という代償を伴ったのである。(37)

もちろん、このような図式的な説明がどれほどの説得力をもつかは、意見の分かれるところである。しかし、少

なくとも、イギリス人とアジア人、アフリカ人との数的不均衡が植民地支配を大きく制約していたことはいえるだろう。一九三五年に北ローデシアの新首都ルサカに建設された壮大な総督官邸は、ヨーロッパ人とアフリカ人の人口比が一对一二〇である植民地において、イギリス君主の威厳を視覚的に示すものと考えられたが、同年、コッパ―ベルトでアフリカ人鉱夫の暴動が起り、威厳と虚勢は紙一重であることが露呈する⁽³⁸⁾。このような白人支配者の立場を「みせかけの帝国」⁽³⁹⁾と考えるのは適切かどうかわからないが、あの帝国主義の権化といわれる総督カーゾン卿の失望の言葉——「インド政府は、何もしいない強大で不思議な組織である」⁽⁴⁰⁾——は、ある意味、正鵠を得ているのではないだろうか。

帝国主義を支える本国のイギリス人の意識を具体的にとらえるのは難しい。帝国の経験がイギリス人を大きく変えたという考えに否定的であるピーター・マーシャルは、それでも、帝国は、多くのイギリス人の想像力をとらえて離さなかったと論じているが⁽⁴¹⁾、妥当な見解といえよう。しかし、その一方で、近年イギリス国内史において、シヨナル・コンセンサスの存在を疑問視する研究が出てきていることも事実である。例えば、マス・オブザヴェーションやギャラップ調査——史料としての問題点はあるが——などから、「人民の戦争」、「人民のウィリアム（ベウアリッジ）」といった言葉にもかかわらず、第二次世界大戦中も戦後も、イギリス人は、どちらかといえば、民主主義や福祉国家にあまり関心がなかったことが指摘されている⁽⁴²⁾。イギリス帝国史においても、今後、このような研究が進められるべきだろう。

「協力」という言葉は、第二次世界大戦の記憶もあって負のイメージを伴う。ロビンソンのプロト・ナシヨナリズムを歓迎するアフリカ史研究者が、彼の協力理論⁽⁴³⁾を受け入れるのをためらったのはそのためである。むしろ、

「抵抗」のほうが、アフリカ人にイニシアティヴを与え、ナショナルリステイックに聞こえる⁽⁴⁴⁾。しかし、協力を肯定的にとらえ、抵抗と同じく、帝国主義に対する正当な反応とみなすのは極端な考えだろうか。ナショナル・ヒストリーが排外的、狹量的な歴史とみなされるのは、ひとつには、これまで地域史研究者が、受容の側面に十分な関心を示さなかったからであるように思われる。ロビンソンとギャラハーがいみじくも「巧みなナショナルリズム」と呼んでいるように⁽⁴⁵⁾、協力は、抵抗と同様に、アジア・アフリカ史研究が検討すべき問題である。

もちろん、モダニズムの超克をめざすポストコロニアリズムにとって、受容は、西洋近代に絡めとられることしか意味しないだろう。「精神の非植民地化」を唱えるグギ・ワ・シオンゴが英語を用いるのをやめたのはそのためである。しかし、彼の著書は、英語で書かれ英語に翻訳されたからこそ、大きなインパクトを与えることができたといえる⁽⁴⁶⁾。反近代の象徴といわれるマハトマ・ガンディーが、英語を駆使したことの意味を考えるべきではないだろうか。マイケル・タウシッグは、「擬態」という概念を用いて、同化||模倣は、支配者への服従と考えられるかもしれないが、実は、対象を把握しそれに成り変わることで、白人の支配を覆そうとする行為であると論じている⁽⁴⁷⁾。また、近代医学による「肉体の植民地化」⁽⁴⁸⁾のような表現は、ポストコロニアリズムの大義のために、人間は、ワクチンよりも死を選ぶべきであると解釈されてもしかたがないように思われる。ヒューマニズム——これも西洋近代といってしまうえば、それまでだが——を考慮しない極端なモダニズム批判は、十分な説得力をもちえない。

協力||受容の問題は、ノン・エリートを対象とするサバルタン・スタディーズにもあてはまる。それが扱う抵抗は、反エリート、すなわち反帝国主義のみならず、反ナショナルリズム||反インド国民会議派の性格を帯びている⁽⁴⁹⁾。第三世界の歴史家でさえ、歴史学を専攻するかぎり、インド国民会議派と同様に、近代との共謀関係から逃れるこ

とができず、サバルタンの声を復元するに主体性を回復する試みは、歴史家のナラティヴによって、その声をかき消してしまふというジレンマは、⁽⁵⁰⁾サバルタン・スタディーズの徹底した反エリート／反ナショナリズムを物語っている。しかし、サバルタン自らが、まったく、帝国主義やナショナリズムと協力関係——近代と共謀関係——になかったといえるのだろうか。生きるために、より良い生活を送るために、彼らは、進んで、ワクチン、キリスト教、学校教育、輸入品、換金作物、そして賃金労働を受け入れたのではないだろうか。サバルタン・スタディーズにみられる非歴史的なネイティヴィズムこそ、サバルタンから声に主体性を奪っているように思われる。

実際、アジアやアフリカの農民は、内外の市場向けの生産を積極的にこなっており、例えば、戦間期のケニアでは、アフリカ人農民は、商品生産高で、政府からさまざまな援助を受けていた白人入植者をはるかに上回っている。⁽⁵¹⁾ トマス・ティムバークは、インド北西部のマルワリーと呼ばれる商人コミュニティが、イギリス人によってもたらされた商取引の機会をとらえて、事業経営を多角化し、北部・北東部一帯に進出していったことをあきらかにしている。⁽⁵²⁾ また、トムリンソンは、一九世紀後半に、インドの一次産品が国際市場向けに大量に生産されるようになる、現地の金融システムは、崩壊するどころか、逆に強化されたと論じている。⁽⁵³⁾ つまり、二元経済モデルは、マーケットとバザールの分離を、接合モデルは、マーケットによるバザールの支配を想定しているが、バザールが、マーケットの力を導入・吸収していると考えすることはできないだろうか。

そうなると、「買弁」も再考する必要がある。この言葉からは、外国資本に従属しつつ、現地人から中間搾取をおこなう在地商人の姿が浮かんでくる。そのような側面は否定できないが、「買弁」は、外国資本の力を過大評価してしまうように思われる。トムリンソンは、カルカッタのイギリス人商會は、資金・信用面で内地の商人や金貸

しに大きく依存しており、そのため、第一次世界大戦後、彼らとの取引がうまくいかなくなる——その主な理由は、インド人商会の台頭——と、急速に経営難に陥ったと論じている。⁽⁵⁴⁾ イギリス人商会とパンヤン（商人）・シユロフ（金貸し）の利害が一致している間は、市場独占という、一見、外国資本が内陸の隅々まで触手を伸ばしているような状況が生じるが、ひとたび両者の取引が困難になると、商業帝国はもろくも崩れてしまうのである。

ア Nil・シールは、中央から地方へとインド全土に広がっていく統治機構を、英語教育を受けたエリートが下から上へのぼっていくことで、ナシヨナリズムは形成されたと指摘している。⁽⁵⁵⁾ 帝国主義はナシヨナリズムの母であるといえなくも解釈に、多くのインド人研究者が反発したのもうなずけるが、別の見方もできるように思われる。彼らエリートが統治機構に入り込んだのは、植民地官僚のインド人化は、非協力・不服従運動と同様に、外国人支配の終焉を早め、一九一九年と三五年のインド統治法も、裏を返せば「インド自治法」にはかならないと考えていたからではないだろうか。このようなナシヨナリズムをどう評価すべきか。著書『ヒンドゥー・スワラージ』のなかで、ガンデーは、若い読者にむかって、「君が望んでいるのは、イギリス人のいないイギリス支配である」といつている。⁽⁵⁶⁾ たしかに、サバルタン・スタディーズのように、一九七五〜七七年の非常事態体制下、強権を發動したインド国民会議派の姿を植民地時代に投影することは可能である。しかし、帝国主義を吸収する「巧みなナシヨナリズム」も、帝国主義に対する正当な反応と考えるべきではないだろうか。

インド国民会議派の言説を考察したギャネンドラ・パンディは、ナシヨナリズムは、自らの正当性を示すために、ヒンドゥー、ムスリム、シークなど宗教コミュニティの「コミュニティ」を帝国主義、特に分割統治の産物ととらえ、その正当性を否定したと論じている。⁽⁵⁷⁾ これは、一九六〇年代から七〇年代にかけて、アフリカの「トライバ

リズム」が、ナシヨナリズムに対抗する植民地時代の負の遺産として非難されたのとよく似ている。部族主義を帝国主義の産物ととらえるのは、アフリカ人の主体性を軽視することになる。彼らがいかに「創造」力に富んでいたかは、テレンス・レインジャーによって十分に示されている。⁽⁵⁸⁾ 実際、タンガニーカについて、ジョン・イーリフが、「ヨーロッパ人は、アフリカ人が部族に属していると信じ、アフリカ人は、属すべき部族をつくった」と述べているように、⁽⁵⁹⁾ 部族を創造したのは、支配者よりもむしろ被支配者だったと思われる。

同じように、カーストを創造したのも、イギリス人よりもむしろインド人だったといえる。バーナード・コーンは、イギリス人は、国勢調査に自らのインド社会観を投影し、カースト、宗教、種族別にインド人を分類・分割したと論じている。一九一一年の国勢調査では、当時のヒンドゥー社会観に基づいて、カーストごとの集計、およびその格付けがおこなわれたが、ヒンドゥー教徒——彼らは、「ジャーティ」という内婚集団に属していた——は、カースト・ランキングを社会的地位を上昇させる絶好の機会と考えたのである。この「サンスクリタイゼーション」⁽⁶⁰⁾とも呼ばれる地位上昇志向は、植民地時代以前からみられた現象だが、国勢調査の魅力は、政府から公的な認知を受けることで、上位ジャーティの抵抗を抑えこめたことである。政府に陳情するために、特に経済的実力のある中間層のジャーティの間で、カースト協会の設立がみられ、新たなカースト名が採用され、祖先の英雄譚などの史書がつくられ、生活様式の改革や教育の普及が進められる。また、同じような地位にあるジャーティが結合して、州規模のカースト協会が結成されることもある。⁽⁶¹⁾ 先述のイーリフの言葉を借りれば、イギリス人は、インド人がカーストに属していると信じ、インド人は、属すべきカーストをつくったといえる。

「トライブ」という言葉は、一九八〇年代以降、国民国家批判や多文化主義の影響もあって、「エスニック・グ

ループ」にとって代わられ、今日ではほとんど用いられなくなっている。ポリテイカル・コレクトネスであれ、エンパワーメントであれ、これは、部族の負のイメージを強化するだけでなく、過去のアフリカ人の営為をみえにくくしてしまおうのではないだろうか。

五 おわりに

以上のように、「中心」／「周辺」の言説によって構築されたイギリス帝国史を再考し、「偏心」というキーワードを導入することで、もう一つの帝国史が考えられるのではないだろうか。帝国主義のダイナミックスにおいて重要な役割を果たしているのは、プッシュ要因よりもむしろプル要因である。ウエスタン・インパクトであれ、植民地支配であれ、ヨーロッパの力は、それだけでは、あのように強大にはならなかっただろう。そこには、それに反発する力と同時に、それを吸収し増幅する力が働いていたのである。アジア、アフリカは、帝国主義を押しつけられただけでなく、それ以上に、自らそれを引き入れたといえる。

最近、ヘリー・テルハールは、オランダのアフリカ人コミュニティが、世俗化したヨーロッパ人の再キリスト教化に乗りだしていることを指摘している。⁽⁶²⁾キリスト教のみならずモダニズムに対して懐疑的になったヨーロッパには、帝国主義を積極的に受容するアジアやアフリカは、想像し難いかもしれない。しかし、そのようなアジア、アフリカは、たしかに存在したのである。

- (1) R.E. Robinson and J. Gallagher, *Africa and the Victorians: The Official Mind of Imperialism* (1961).
- (2) John E. Flint, "Britain and the Scramble for Africa", in R. W. Winks (ed.), *The Oxford History of the British Empire V: Historiography* (1999), p.458.
- (3) J.S. Galbraith, "The 'Turbulent Frontier' as a Factor in British Expansion", *Comparative Studies in Society and History*, 2 (1960).
- (4) D.K. Fieldhouse, *Economics and Empire 1830-1914* (1973), p.476; idem, "Can Humpty-Dumpty Be Put Together Again?: Imperial History in the 1980s", *Journal of Imperial and Commonwealth History (JICH)*, 12/2 (1984).
- (5) D.A. Low, *The Contraction of England* (1985), pp.25-26; J.S. Galbraith, *Reluctant Empire: British Policy on the South African Frontier, 1834-1854* (1963); C.W. Lowe, *The Reluctant Imperialists*, 2 vols. (1967); C. W. de Kiewiet, *The Imperial Factor in South Africa: A Study in Politics and Economics* (1937).
- (6) P.J. Cain and A.G. Hopkins, *British Imperialism*, 2 vols. (1993) [竹内幸雄他訳『シムン・トマン資本主義の帝国』(名古屋大学出版会)一九九七年]。
- (7) David Cannadine, "The Empire Strikes Back", *Past and Present (P&P)*, 147 (1995). 『イギリスの歴史』(一九九二年)やキヤナタインが編集する『ペンギン・イギリス史』シリーズ(一九九六年)も「イギリスの逆襲」である。
- (8) John Darwin, "Imperialism and the Victorians: The Dynamics of Territorial Expansion", *English Historical Review*, 112 (1997), pp.614, 616.
- (9) A.G. Hopkins, "Back to the Future: From National History to Imperial History", *P&P*, 164 (1999), p.198.
- (10) A.G. Hopkins, "Development and the Utopian Ideal, 1960-1999", in Winks, *op. cit.*, pp.650-651.
- (11) Max Beloff, "Empire Reconsidered", *JICH*, 27/2 (1999), p.25.
- (12) Wm. Roger Louis and Ronald Robinson, "The Imperialism of Decolonization", *JICH*, 22/3 (1994), p.494.
- (13) Cf. D.K. Fieldhouse (ed.), *The Theory of Capitalist Imperialism* (1967), xv.

- (14) R.E. Robinson, "Non-European Foundations of European Imperialism : Sketch for a Theory of Collaboration", in R. Owen and B. Sutcliffe (eds), *Studies in the Theory of Imperialism* (1972) [reprinted in Wm. Roger Louis (ed.), *Imperialism : The Robinson and Gallagher Controversy* (1976), p.147]; idem, "The Ex-centric Idea of Imperialism, With or Without Empire", in W.J. Mommsen and J. Osterhammel (eds.), *Imperialism and After: Continuities and Discontinuities* (1986).
- (15) Dane Kennedy, "Imperial History and Post-Colonial Theory", *JCH*, 24/3 (1996), pp.346, 359.
- (16) Gayatri Chakrabarty Spivak, "Subaltern Studies: Deconstructing Historiography", in Ranajit Guha (ed.), *Subaltern Studies IV* (1985).
- (17) Patrick Joyce, "The Return of History: Postmodernism and the Politics of Academic History in Britain", *P&P*, 158 (1998), p.208.
- (18) Gyan Prakash, "Subaltern Studies as Postcolonial Criticism", *American Historical Review*, 99 (1994), p. 1486.
- (19) Immanuel Wallerstein, *Geopolitics and Geoculture: Essays on the Changing World-System* (1991), pp.14-15 [丸山勝訳『ポスト・アメリカ』(藤原書店 一九九一年)].
- (20) Edward W. Said, *Culture and Imperialism* (1993), p.132 [大橋洋一訳『文化と帝国主義Ⅰ・Ⅱ』(みすず書房 一九九八、二〇〇一年)].
- (21) John M. Mackenzie, *Orientalism: History, Theory and the Arts* (1995), p.15 [平田雅博訳『大英帝国のオリエンタリズム』(ワネルヴァ書房 二〇〇一年)]. 木畑洋一「ポストコロニアリズムと歴史学」『思想』八九七号(一九九九年)も参照。
- (22) John M. Mackenzie, "Edward Said and the Historians", *Nineteenth-Century Contexts*, 18/1 (1994), p.22.
- (23) 例へば「模倣」おまひ「(ズブチンのズン) クラロメロム」に關するミンの考察を参照。Homi Bhabha, "Of Mimicry and Man : The Ambivalence of Colonial Discourse", *October*, 28 (1984), p.129 ; idem, "Signs Taken for Wonders : Questions of Ambivalence and Authority Under a Tree Outside Delhi, May 1817", in

- Francis Barker *et al.* (eds.), *Europe and Its Others : Proceedings of the Essex Conference on the Sociology of Literature, July 1984* (1985), vol. 1, pp.100-101.
- (74) Phillip Darby, "Taking Fieldhouse Further: Postcolonizing Imperial History", *JCH*, 26/2 (1998), p.242.
- (75) E.T. Stokes, "Late Nineteenth-Century Colonial Expansion and the Attack on the Theory of Economic Imperialism: A Case of Mistaken Identity?", *Historical Journal*, 12/2 (1969), p.293.
- (76) Tapan Raychaudhuri, "A Re-interpretation of Nineteenth Century Indian Economic History?", in Morris D. Morris *et al.* (eds.), *Indian Economy in the Nineteenth Century: A Symposium* (1969), p.96.
- (77) Goran Hyden, *Beyond Ujamaa in Tanzania: Underdevelopment and an Uncaptured Peasantry* (1980).
- (78) D.K. Fieldhouse, "The Economic Significance of Colonialism in the Twentieth Century", p.13 (大塚外大メロー・ニコルズ・ジャーナル・ヤリナー・ピーク 一九九九年四月三日).
- (79) Bruce J. Berman and John Lonsdale, *Unhappy Valley: Conflict in Kenya and Africa* (1992), p.132.
- (80) Kenneth Pomeranz, *The Great Divergence: China, Europe, and the Making of the Modern World Economy* (2000), p.269.
- (81) Pethick-Lawrence to Wavell, 7 March 1947, in Nicholas Mansergh *et al.* (eds.), *The Transfer of Power 1942-7 IX : The Fixing of a Time Limit*, 4 November 1946-22 March 1947 (1980), doc.505.
- (82) Ronald Hyam, *Britain's Imperial Century 1815-1914: A Study of Empire and Expansion* (1976), p.15.
- (83) Dane Kennedy, *Islands of White: Settler Society and Culture in Kenya and Southern Rhodesia, 1890-1939* (1987).
- (84) Cf. Nicholas Thomas, "Imperial Triumph, Settler Failure", in *idem*, *Colonialism's Culture : Anthropology, Travel and Government* (1994).
- (85) Bruce J. Berman, *Control and Crisis in Colonial Kenya: The Dialectic of Domination* (1990), p.41.
- (86) Neil Charlesworth, *British Rule and the Indian Economy, 1800-1914* (1982), p.70.
- (87) B.R. Tomlinson, "India and the British Empire 1880-1935", *Indian Economic and Social History Review*

- (38) *JESHR*, 12/4 (1975), pp.338-339; idem, "India and the British Empire 1935-1947", *JESHR*, 13/3 (1976).
- (38) Andrew Roberts, "The Imperial Mind", in idem (ed.), *Cambridge History of Africa VII: From 1905 to 1940* (1987), p.67.
- (39) Judith M. Brown, "Imperial Façade: Some Constraints upon and Contradictions in the British Position in India, 1919-1935", *Transactions of the Royal Historical Society*, ser.5, 25 (1975).
- (40) Anil Seal, "Imperialism and Nationalism in India", *Modern Asian Studies* (MAS), 7/3 (1973), p.321.
- (41) P.J. Marshall, "Imperial Britain", *JCH*, 23/3 (1995), pp.392-393.
- (42) Jose Harris, "Did British Workers Want the Welfare State? : G.D.H. Cole's Survey of 1942", in J.M. Winter (ed.), *The Working Class in British Politics* (1983), p.214; Tony Mason and Peter Thompson, "Reflections on a Revolution?: The Political Mood in Wartime Britain", in Nick Tiratsoo (ed.), *The Athle Years* (1991), pp.59-60; Steven Fielding, "'Don't Know and Don't Care': Popular Political Attitudes in Labour's Britain, 1945-51", in *ibid.*, p.121; Steven Fielding, Peter Thompson and Nick Tiratsoo, 'England Arise!': *The Labour Party and Popular Politics in 1940s Britain* (1995).
- (43) Robinson, "Non-European Foundations of European Imperialism".
- (44) Terence Ranger, "Connexions between 'Primary Resistance' Movements and Modern Mass Nationalism in East and Central Africa", *Journal of African History*, 9/3 (1968), p.439.
- (45) R.E. Robinson and J. Gallagher, "The Partition of Africa", in F.H. Hinsley (ed.), *New Cambridge Modern History XI: Material Progress and World-Wide Problems, 1870-1898* (1962), p.640.
- (46) 彼自身「*Politics of Language in African Literature* (1986), xiv [原本文献他語「*精神の非種族性*」(巻三「書壇」一六二-二七)]」.
- (47) Michael Taussig, *Mimesis and Alterity: A Particular History of the Senses* (1993), xiii, p.16.
- (48) David Arnold, *Colonizing the Body: State Medicine and Epidemic Disease in Nineteenth-Century India*

- (1993), p.9.
- (9) Ranajit Guha, *Elementary Aspects of Peasant Insurgency in Colonial India* (1983), p.4.
- (10) Dipesh Chakrabarty, "Postcoloniality and the Artifice of History: Who Speaks for 'Indian' Pasts?", *Representation*, 37 (1992) [reprinted in Ranajit Guha (ed.), *A Subaltern Studies Reader, 1986-1995* (1997), pp. 285-286].
- (11) Roger Van Zwanenberg, "The Development of Peasant Commodity Production in Kenya, 1920-40", *Economic History Review*, ser.2, 27/3 (1974), p.442.
- (12) Thomas A. Timberger, *The Marwaris: From Traders to Industrialists* (1978).
- (13) B.R. Tomlinson, *The Political Economy of the Raj: The Economics of Decolonization in India 1914-1947* (1979), p.10.
- (14) B.R. Tomlinson, "Colonial Firms and the Decline of Colonialism in Eastern India 1914-47, *MAS*, 15/3 (1981), p.485.
- (15) Seal, op.cit., pp.334, 347.
- (16) Judith M. Brown, *Gandhi: The Prisoner of Hope* (1989), p.66.
- (17) Gyanendra Pandey, *The Construction of Communalism in Colonial North India* (1990), p.9.
- (18) Terence Ranger, "The Invention of Tradition in Colonial Africa", in Eric Hobsbawm and Terence Ranger (eds.), *The Invention of Tradition* (1983) [前川啓治他訳『創られた伝統』(紀伊国屋書店)一九九一年] .
- (19) John Iliffe, "The Creation of Tribes", in idem, *A Modern History of Tanganyika* (1979), p.324.
- (20) M.N. Srinivas, *Social Change in Modern India* (1966), ch.1.
- (21) Bernard Cohn, "The Census, Social Structure, and Objectification in South Asia", in idem, *An Anthropologist among the Historians and Other Essays* (1987), pp.248-250; Judith M. Brown, *Modern India: The Origin of an Asian Democracy* (1985), pp.158-59.

(32) Gerrie ter Haar, *Halfway to Paradise : African Christians in Europe* (1998).

(大学院後期課程学生)

Rethinking British Imperial History

Akira MIYAZAKI

Recent years have seen a revitalised history of the British Empire emerging from the work of those scholars who seek their *raison d'être* in a post-imperial and post-colonial world. Revitalised imperial history leads to a revitalised empire which in turn reasserts the primacy of the centre as against the periphery; this also means a shift away from indigenous history.

Using the concept of 'excentric' imperialism rather than the centre/periphery model this article argues that the power of British expansion and rule may have been overestimated; that the collaboration, as well as the resistance, of indigenous people should be given due consideration; that the non-European pull seems more powerful than the European push. In this way indigenous history will become an integral part of imperial history.

It is also suggested that imperial historians should not keep away from post-colonial analysis because of its unhistoricity. It may provide intriguing insights and open up new avenues of inquiry.

キーワード：帝国主義 中心 周辺 偏心 協力